

---

## 優勝校インタビュー

2010年度関東甲信越地区大会 中学の部 優勝 開成学園中学校  
監督 ジーワンラーニング代表 神尾雄一郎先生

---

——ディベートに触れることで、教育者としての幅は段違いに広がる。——  
——人生を通じた中での自己研鑽。それに耐えるだけの深みがディベートにはある。——

今回は2010年度関東甲信越地区大会中学の部優勝、開成学園中学校・高校弁論部監督 神尾雄一郎先生（ジーワンラーニング代表）にお話を伺いました。

**インタビュー（以下太字ゴシック体）：**本日は貴重な時間を割いてインタビューにご協力頂き、本当にありがとうございます。さて、関東地区大会優勝という輝かしい成績を打ち立てられたわけですが、ここに至るまでの先生の経緯を教えてくださいようか。

高校時代(先生はご自身が開成高校出身)の親友が弁論部部長だったんです。で、「面倒をみてやってくれ」と言われて。いざ行ってみたら選手がものすごく頑張っていた。当時はいわゆる「早口ディベート」からの脱却の時期でした。

よくわからない資料を使ったり、ものすごい数の反駁をしたりして、叩きのめすような試合から、対話するような、議論を通じて何かに迫っていく試合への過渡期でした。それを見ていて、これは楽しいなど。

そして監督をして、8年かかりました。関東・甲信越優勝まで。すごくうれしかったです。宿願でした。

生徒さんと一緒に活動を続けていく中で、

**あ、やっていてよかったなとか、成長を実感する時というのはありましたか？**

開成は学校柄もあり、みんな頭はエース級です。ただ、その一方で、「自分が中心」で動いている「自分が自分が」の我が強い人間や、他人に黙って従うだけの人間も少くないのです。

そういう生徒達がディベートを通じて変わっていくのですね。

立場の違う意見を聞いたり、あるいは人に分かりやすく伝える訓練を通じて、人当たりが明らかに変わる。コミュニケーションの素養が身に付くのです。

この間、自分が面倒見てきた連中で初めてOB会を開いたのですが、話をしていて実に楽しかった。やはり、コミュニケーション力を磨いてきた積み重ねがあるのかなと。ディベートを通じて人間形成に触れていく喜びは実に大きいものがあります。

**教育者としてディベートに触れるメリットというのは大きかったのでしょうか。あるいは、どのようなメリットがあるのでしょうか。**

うか。

ディベートに触れることで、教育者としての幅は段違いに広がるように思われますね。

特にいかに分かりやすく伝えるかということは、ディベートによってかなり変わりました。教育は、知っている人が知らない人に教えるというのが基本だと思うのですが、そこで分かりやすく伝えるということは、話のレベルを下げたり、聞き手に合わせたりするということでは必ずしもないと思うのです。ディベートでは、相手やジャッジが分かっているのかどうかには非常に気を遣いますが、分かってもらっていないと察知したら、いかに相手を引き上げるか、キャッチアップできるかが鍵になるのではないかと感じております。ですので、生徒に何かアドバイスをするにしても、わざわざ中学生向け、高校生向けに話のレベルを下げるのではなく、どうすれば彼らが議論の核心をつかめるようになるかに心を砕いて、指導をしているつもりです。

ジャッジの講評を聞くことも意義深いように思われます。単に座っているだけじゃだめだけれど、ちゃんと聞いていると、ああこのジャッジの講評は分かりやすいとか、説明責任を果たしているとかを感じ取れますし、そうした視点を持って耳を傾けていれば自分のスキルアップにもつながられるでしょう。

正直これは課外活動ですから、先生自身の余暇時間を割くということになります。でもそれは、カルチャースクールや自己啓発セミナーのようなものに比べたら、相当メリットは大きい。私にとっては、ディベ

ートはライフワークの柱の一つになっています。人生を通じた中での自己研鑽。それに耐えるだけの深みがディベートにはある。

これからも、何らかの形でディベートに関わりは持っていきたいと思っております。

とはいえ、とりあえず全国制覇はしたいですね。(笑)

**ところで先生は中学高校とも監督をされているわけですが、中学と高校とでの顧問の役割に何か違いはあるのでしょうか。**

かなり違うと思います。それこそ、中高のディベートは別物ではないかという気もしています。タイムフォーマット（試合時間）の違いもありますし、論証のレベルもやや異なっているように感じています。

顧問の役割と言う点でいうと、中学は少し顧問の介入が必要かもしれません。生徒と二人三脚でやっていくというイメージでしょうか。一方、高校は生徒の求めに応じるだけのサポート役に徹する。それぞれのメリットとしては、中学では、より顧問が主体性を発揮できます。自分がチームの一員として一緒に学んでいく。高校は、むしろ生徒から教えてもらうという感じですね。

**先生は中学と高校それぞれで監督をされていて、また、高い成果を上げられています。学校の属性などによって、ディベート教育を成功させるためのノウハウのようなものはあるのでしょうか。**

公立だと異動が大変なのではないでしょうか。新しい学校での立ち位置を確保しながらやるというのは相当ハードなのではな

いかと心配してしまいます。中には行く先々でディベート部を立ち上げられている先生もいらっしゃると思いますが、それは残念ながらレアケースに属してしまうのではないかと思います。

こうした点を考えると、ディベートに取り組むにあたっては、一人でやらずに、新しい学校の中で仲間を見つけることが大事なのではないでしょうか。一人でなければ、誰かが異動しても、生徒はディベートを続けることができる。そして、仲間がいることで、立ち位置も確保できる。それが可能であるならば、公立でも十分普及はできるのではないかと思いますし、むしろ輪を広げていくという観点からは、私立よりも大きな力を発揮されていくのではないかと思います。

一方、私立の先生にはディベートはすごくお勧めできる。異動はまずないし、生徒のレベルが担保されている。学校のカラーで結構違うとも思いますが、授業の内容もある程度自由に組める場合もあるでしょうから、慣れてきたらディベートを授業にするとかも可能なのではないかと思います。

あと、中学と高校の差というものもある。やはり高校になると自主性が重んじられて、先生が一方向的にやらせるのは大変でしょう。特に、関心を持っていない生徒を引き寄せるのは難しいかもしれない。だからそういう意味では、高校では、まずはやらせてみて、生徒自身に興味関心を持たせるところから始めなければならぬ。部活運営でもそうですね。中学校はかなりの部分でやり方を教えるけれど、高校は、生徒自身にやらせることになるでしょうから。

## 同じような属性、特に、進学校の先生方にディベートを薦めるとしたら、どのような点がありますか？

長年受験指導に携わってきた立場からすると、大学受験で求められる能力というのは、学習の積み重ねに尽きると感じています。受験当日でのどんでん返しはない。努力の総量が重要。一方、ディベートとなるとちょっと違う。積み重ねも大事だけれど、瞬時の対応力、筆記試験では計れないものが問われる。

しかしながら、現代社会においては、受験勉強一本槍では身に付かないものが、他との差別化を図る上で重要になってきている。

上位校の先生は、自分の教えている生徒が今後日本を背負って立つ人材になるという認識をある程度お持ちだと思うのです。その生徒たちに、一生涯役立つ能力や考え方を与えるのは非常に大事なことでしょう。受験のための学習塾とかとは違う、学校にしかできないこと、優秀な生徒が集まっているからこそできることを提供すべきではないかと。

## 神尾先生、長い時間インタビューにお付き合い頂いて、本当にありがとうございました。最後に、何か一言ありましたらお願いします。

そうですね。ディベートの一つのイメージとして、「相手を打ち負かすための手段」にしかすぎないと思っている人がいる。そういうイメージがまだまだ強い。

でもロジックがイーブンであったとした

ら、最後はストーリーとして訴えかける力、伝える力が不可欠になってくるのがディベートなのだと思うのですね。

実は、今までは、伝える力を磨くことよりも、嘘のないディベートを徹底することに全力を注いできました。後から起こされた議論を再度見返されたとしても、検証に耐えるような議論。そうした積み重ねによって、昨年の関東・甲信越優勝につながった。

一方、訴えかけるパワーの不足によって、

神尾先生には、中学高校共に指導をしていらっしゃるという立場から、また、日本有数の進学校としての立場から、それぞれにフォーカスした個別のご意見・アドバイスもお伺いしました。また、神尾先生から直筆のディベートに対する今回のインタビューのご意見を頂いておりますので、後掲させていただきます。神尾先生、ありがとうございました。

(インタビュアー 志村)

全国ではベスト 16 に留まってしまいました。

やはり、コミュニケーションは大事なんですよね。今年からのチーム作りでは、「嘘のないディベート」に「訴えかけるディベート」を上乗せして、さらなるレベルアップを図っていきたいと考えています。そして、たとえ少しずつではあったとしても、ディベート本来の持つ魅力を、様々な形を通じて多くの人達に訴えかけていけたらと願っております。

---

## 神尾先生記事

### ・生徒と共にディベート活動に携わっての全体的な感想

あくまでも主役は選手であり、自分は監督という指導者の立場ではあるわけですが、毎年一体となって全国制覇を目指しながら、議論の核心に迫っていくという試みから得られる知見や感動は、実に大きなものです。特に、一つの論題をじっくりと時間を掛けて検討していく経験や、他校の選手や審判の方と試合を通じて交流していく機会を持つことで、選手である生徒も、そして監督である自分も、物事に対する新たな視点を得たり、洞察力を深めたりできる恩恵に浴していると感じております。

もっとも、教育の一環とはいえ、競技としてのディベートに携わっている以上、選手も監督も全国制覇を最大の目標にはなるため、試合に負ければ悔しく、また納得のいかない判定には時に心穏やかでなくなることもないことはありません。しかし、それでも後で振り返ってみれば、どんな試合からもどんな議論からも、今後の人生に活かせるような教を授かっているなという実感があります。

・ディベートを始める前と後とで生徒はどう変わったか

まず大きいのは、コミュニケーション力の向上です。特に、本校には、筆記試験には強くても口頭試問には弱いという生徒が少なくないことから、ディベートに必要な表現力を磨いていく過程で、自分だけがわかればいいという独善的な思考から脱却し、如何にすれば他者にわかってもらえるのかといった協調性を身につけていく様子が毎年見受けられます。また、機械的に肯定側か否定側に分けられるというディベートの特性から、自分の主観と客観的視点の双方を持ち合わせて、一つの物事を多面的に捉えようとする姿勢が自然と身につけていく感じも受けております。

・長期的に見て中高生がディベートを学ぶことにはどのようにメリットがあると思うか

先ほど触れた、コミュニケーション力の向上や物事を多面的に捉えようとする姿勢は、学歴や資格だけで将来安泰とは言えない現代社会を生きていく上で、大いに役立ってくると思います。他者との関わり合ってこそその自分であることを考えれば、社会生活を送る上で、自身に対する周囲からの理解を深めてもらうことや、不毛な感情的対立に巻き込まないことは、実り多き人生を送っていく鍵となってくるに違いありません。そしてこうした能力は、受験勉強の中ではなかなか身につけることが難しいことから、ディベートに真摯に取り組んでいたことで得られてきた財産を、卒業後の様々な場面で実感することが多いかと思われまます。

・受験との兼ね合いでメリット・デメリットはあるか

こと受験との兼ね合いという点だけに絞れば、立論作成を経験することにより、文章構成力の向上が確実に見込めるものと思います。中学生であれば原稿用紙 4 枚、高校生であれば 6 枚程度の原稿をゼロから作り上げる経験を積み重ねることで、国語や英語における記述型問題への抵抗感が和らぎ、むしろ自信を持って解答できるようになるはずです。また、一つの論題についての資料を読み込んだり、じっくりと時間を掛けて検討したりしていく経験が、日頃の学習や試験において必要不可欠となる集中力の向上に寄与していく面も見落とせないでしょう。

一方、デメリットとまではいきませんが、論題研究や立論作成、証拠資料収集には膨大な時間を必要するため、暗記型学習や問題演習の時間まで割かれてしまうという面はあるかと思われまます。日頃小学生から社会人までの受験指導を生業としている立場からすると、受験で求められる能力や受験勉強を通じて磨かれる能力と、ディベートのそれは、ある程度距離があるかなという気が致しております。

・ディベートを導入すべきかどうか考えている他校の教員がいたら、何か一言

教員の方御自身がディベートに対して興味を抱き、顧問や指導者という立場であっても

生徒と一丸となって取り組みたいと思われるのであれば、強く導入を勧めたいと思います。一方で、一応ディベートにも取り組んでいる姿勢を見せておかななくてはならないといった、義務感や強迫観念に駆られて取り組むのであれば、無理に取り入れる必要はないかと考えます。とにかく、ディベートに触れる最初の経験がどれだけ有意義なものであったかが、生徒の今後の学習姿勢を形成していく上で大きく関わってくるため、教員の方御自身が意欲溢れる水先案内人としての役割を果たしていただけるのであれば、生徒にとってこれ以上の幸せはないと考える次第です。

また、おこがましい言い方にはなりますが、教員の方御自身がディベートに取り組むこと自体、教育者としての幅を広げる極めて大きな糧になると、私自身の体験を持って強く訴えさせていただきたく存じます。生徒の幅広い成長過程を見守れたり、社会的課題である論題に対する見識を深められたりすることは、なかなか日々の業務だけでは限界があるのではないかと思うのです。

私も、より多くの中高生にディベートを経験してもらいたいという思いと、自分自身の教育者としての自己研鑽をさらに図っていきたく強く願う一人として、今年から学習塾という枠組みの中で、中学生を対象とした国語能力全般を磨く講座において、ディベートカリキュラムを取り入れるという新たな試みを始めております。是非、同じような思いを抱いた同志が一人でも教育の場に増えていくことを、心より祈念してやみません。

2011年4月17日  
開成学園弁論部監督  
ジーワンラーニング代表  
神尾雄一郎